



西予市 平成30年7月豪雨

記録と記憶

災害と向き合い
一歩を踏み出す



はじめに

「平成30年7月豪雨災害」は、7月5日から8日にかけて記録的な大雨となり、西予市宇和町では最大24時間降水量及び最大48時間降水量が観測史上1位を更新するなど、西日本を中心とする各地で大きな爪痕を残しました。

西予市では、6名もの尊い命を失いました。衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、浸水や土砂災害により多くの家屋や農地等、大切な財産を失われた市民の皆様に対して、お見舞いを申し上げます。

平成30年7月7日の早朝、私はこの日を忘れることはありません。一瞬にして、多くのものが奪われ、大きな喪失感に包まれることとなりました。

しかし、このような中、被災された市民の皆様はもとより、市内外のボランティアや自治体、自衛隊や消防団、各種事業者・団体等のご協力、物資・義援金など多くの温かいご支援を賜りまして、今日まで前に歩むことができたと感じております。皆様、誠にありがとうございました。

復興・復旧は道半ばの状況であり、元の平穏で自然豊かな美しい西予市を取り戻し、安心して暮らせるよう、西予市一丸となって取り組んでまいります。

本誌は、この未曾有の災害を記録と記憶にとどめ、その教訓を風化させることなく次世代に伝えることを目的に取りまとめました。本誌の発刊が、自助・共助・公助にわたる取り組みを今まで以上に推し進める契機となり、災害に強い西予市となることを祈念いたします。

結びに、本誌の作成にあたり、ご協力いただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

西予市長 管家 一夫

第1章 あの日あったこと 12

第2章 命を守る 22

第3章 守り抜く 32

第4章 生活を再建する 50

第5章 復興の歩み 56



県内豪雨18人死亡



土砂崩れ氾濫 12人不明

肱川沿い 広範囲に浸水

【本紙記者・山本 隆雄】
 県内各地で豪雨が続き、土砂崩れや氾濫が相次いで発生している。特に、肱川沿いの地域では、広範囲に浸水し、12人が行方不明となっている。また、県内各地で18人が死亡している。被災者への支援活動も進められている。

（本紙記者・山本 隆雄）
 県内各地で豪雨が続き、土砂崩れや氾濫が相次いで発生している。特に、肱川沿いの地域では、広範囲に浸水し、12人が行方不明となっている。また、県内各地で18人が死亡している。被災者への支援活動も進められている。



7市町 400人以上孤立

【本紙記者・山本 隆雄】
 豪雨による浸水や土砂崩れで、県内7市町の400人以上が孤立している。被災者への支援活動も進められている。







助け合い一歩ずつ

西予・野村避難所ル木

(一面から続く)
西予市野村地区の避難所になつてゐる野村中学校体育館で、マスクをした楠高男さん(72)は時折、ひとくせき込んでいた、「口を押さえてするんやけど、夜はみんな寝ようなさるのに目がさめろうなあ」

豪雨の数日前から体調がおかしかったという。持病もおり、心臓にペースメーカーを入れていて、50年も歩けん。腰も手術しとる」。高い棚に置いたプラスチック製の薬箱は何とか浸水しなかった。2人で暮らしている孫の男(23)と避難した。「孫が本学



11日午後2時20分、又、西予市野村町河下の野村中学校

病の不安 店再開の夢 児童も懸命手伝い

「7日は自宅に消防団が避難を呼び掛けにきた。『そないかな、と思ったんよなあ。それが間違ひ』。蒲鉾をしいたら、『ほ、ほと音がし、排水口だと思ってる』と、玄関裏のサッシの下から水がこぼれてきた。すぐに荷物をまとめた。もうとしたが水が胸まできた。首までつかりながら孫の立てかけた旗立で命からがら高台に上り、助かった。

「不安なこと言えば、じいちゃんのこと。自宅の屋根除から帰ってきた男性は言葉数は少ないが、高台さんかな離れた。」

「雨の音とが聞こえるのが覚め。大丈夫って分かってるんですけど、なんか怖い。」

水害の夜、中学校に移動するまで、集合所で懐中電灯とろうそくで過ごした。「初めて真っ暗な町を見た。こゝまで暗いんか。と、体育館の小さな光にすこゝ安心した」

親が片付けをしている間、避難所で夕方まで過ごす小学

理由を聞くと、喜美さんは急に真面目な顔で「手伝いたかった。ほかにやっていた」と言い、救護物資並べ、文庫、掃除、トイレを流すための水の用意、「風呂」役所の人の手、先生たちへ全部、「飯とやかや」ももっているから」夕方樋口ヒデ子さん(88)洋子さん(82)が自宅の片付けから帰ってきた。餅店を経営し、「コープあひめ」のスーパー3店舗に出荷するなどしてきたが、地下の加工場と1階の売り場が浸水した。洋さんは今年1月、夫をくし、少し落着いたと思つたばかり。住まいのある隣は被害を免れたが、当初は餅店はやめて勤めに出るかな」と思っていた。

「うち、小娘けど辛抱強い母が、養子のためた資金で始めた店、母が元氣なうちに閉めればショックだろうなと。それにヒデ子さんは自宅の片付け中、2階裏について朝より頼んで、日替りに朝晩2回、荷物をまとめて知人に頼み、作業中の自宅に來てしまった。」

「母を自分でみたい。無添加の西芋産にはわつてやてあげて、お家に入も待つてくれている。半年後か一年後にでも再開したいです」

(二宮保太郎)

A photograph of a traditional Japanese building with a tiled roof and a wooden fence, viewed from a street. A blue pedestrian crossing sign is visible in the foreground.

A soldier in camouflage gear is walking from right to left across a dusty, debris-strewn area. The soldier is holding a red baton in their right hand. To the left of the soldier is a large pile of rubble, including twisted metal and broken concrete. In the background, there is a large, dark, irregular shape that appears to be a crater or a large pile of earth. The overall scene suggests a post-conflict or disaster zone.